

調査研究報告「静岡の茶歌再創造と現代的奏演」

—市民参加型をめざして—

A report on research for recreating tea songs in Shizuoka

Prefecture and its contemporary performance

柳 沢 信 芳・大 槻 寛・小 西 潤 子

Nobuyoshi YANAGISAWA, Hiroshi OTSUKI and Junko KONISHI

（平成 17 年 9 月 30 日受理）

はじめに

本報告は、平成 16 年 5 月から実施している「学校と地域社会を結ぶ民謡の発展的創造と現代的奏演に関する調査研究」および「静岡県の民謡再発掘とその現代的再創造に関する調査研究」¹のうち、平成 16 年 10 月から平成 17 年 9 月まで²の経緯および結果をまとめたものである。今回は、茶歌やその奏演に関する先行事例調査や聞き取り調査など平成 16 年度前半期の成果をふまえた追調査に加え、地元音楽関係者などを交えた懇話会および音楽表現学会におけるシンポジウムの開催により、市民参加型の茶歌再創造と現代的奏演という新しい試みを展開した。また、その経緯を新聞やラジオによって広く周知することにより、さらなる協力者が得られた。

以下では、1. 関連施設などの視察、2. 関連演奏会・祭典などの見学、3. 茶歌・茶文化に関する聞き取り調査、4. シンポジウム・学会等に分類整理し、それぞれの概要および成果に関する簡単なコメントを記す。また、参考として 5. 検討会議と主要議事等をまとめた。

1. 関連施設などの視察

1.1 韓国・済州島の緑茶文化

本プロジェクトの調査研究を相対化する目的で、東アジアの緑茶文化の実態を把握することにした。その手始めとして、2004 年 12 月 12 ～ 15 日、大槻、柳沢、小西の 3 人で韓国・済州島を訪問した。済州島は、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、温州蜜柑の産地としても知られる観光地である。また海のルートによる内外との交通も盛んで、韓国本土とはやや異なる独自の文化を形成してきた。このように静岡県と類似点もある環境のなかで、緑茶文化がいかなる位置を占めているのかが最大の関心事であった。

そのために、まずは当該地の伝統的な生活に触れることを考えた。済州島には、城邑民俗村のように伝統的な暮らしが一部営まれている村があり、文化施策上これらを保存し村の人々の妨げにならない程度に観光資源化している。われわれは、まず城邑民俗村（南済州郡表善面城邑里）と済州市済州民俗村博物館（南済州郡表善面表善里）を視察した。城邑民俗村では、「五味茶」という果実のはちみつ漬けをお湯で

割ったお茶を接待された。これにより、当該地の村人の生活に根づいているお茶が緑茶ではないことがうかがえた。続いて訪問した済州民俗村は、14万坪の広大な土地に100年前の済州の姿を再現し、117棟の伝統屋敷と8000点の民俗資料を備えた展示場であった。ここでも、緑茶に関する情報は得られなかった。

ところが、茶畑に囲まれた雪緑茶（ソルロクチャ）ミュージアム（南済州郡安徳面ソグァン里）は、緑茶に関する情報を集めた展示館、映像室、喫茶室を備え、雪緑茶、緑茶ソフトクリーム、緑がかった陶磁器製あるいは唐草模様の茶器の展示販売も行う緑茶の博物館であった。これは、緑茶文化の振興を図って1996年に設立された企業経営の博物館である。建物のデザイン、設立時期、展示物や展示方法など、昨年度調査した静岡県金谷のお茶の郷博物館と類似していた。こうしたことから、済州島においては静岡県内と同時期に新しい緑茶文化の創出が試み始られたものと推察された。



写真1：雪緑茶（ソルロクチャ）
ミュージアムのパンフレット

1.2 台湾の茶文化と音楽

済州島に続き、2005年2月20～24日、大槻、柳沢、小西の3人で台湾を視察した。その予備調査により、台湾各地に点在する茶の産地を結ぶ公共の交通ルートがほとんどないことがわかった。そこで、今回訪問する茶の産地は坪林地区の坪林茶業博物館1ヶ所にとどめ、台北市内の複数の茶芸館等で調査を行った。また、順益台湾原住民博物館および故宮博物院を視察し、文化的背景への理解を深めた。

台北市内の茶芸館としては、それぞれ異なる趣のある竹里館、耕読園、茶楽園を訪れた。竹里館の飲茶コースの接客にあたったのは、9ヶ月前か

ら勤務する新潟出身の若い男性であった。台湾が高度経済成長に入った1980年代からこのような飲茶店ができ始め、インストラクター養成の専門学校もあるという。竹里園では、飲茶の雰囲気高める音楽として、「禅シリーズ」のコンパクトディスク（CD）が使われていた。

一方、茶楽園では多種の茶の葉が用意されており、それぞれのお茶の香り、味を楽しむことができた。また、一角には音楽を奏でている絵画も設置されており（写真2）、台湾では飲茶と音楽が強く結びついて



写真2：茶楽

いる印象を受けた。また、市内のCDショップには茶をテーマにしたアルバムが多数並んでいた。そのタイトルの一例を挙げると、「茶禅一味・興茶的対話」、「茶雨」、「茶道」、「茶酔」、「茶詩」などである。これらは、伝統的なモチーフによるものというよりは、現代作曲家がイメージした茶と人々との対話や茶畑の風景、茶葉と産地による味と香りの違いを音楽的に表現したものであり、茶音楽創造活動の一環として位置づけられる。このように、台湾では茶を楽しむ文化と音楽とが互いに結びついて、都市の新しい文化として結実していることがわかった。

坪林茶業博物館は、北部の茶業中心地にある(写真3)。包種茶の産地である坪林地区が町おこしのために設立したもので、福建省安溪風建築の四合院を再現した建物と美しい江南庭園からなる。茶事、茶史、茶芸の3つのテーマ館では、製茶法、古今東西のお茶の歴史、お茶の風習と茶器芸術が扱われていた。地域の博物館という点では、静岡県のお茶の郷博物館にも通じるところがある。近年では、お茶に関する施設をめぐる日本からの若い世代の観光客も多いと聞いた。



写真3：坪林茶業博物館

順益台湾原住民博物館の展示内容は、台湾先住諸民族の歴史文化である。アイヌの人々の使用するムックリに類似した口琴や鼻笛等、楽器の展示も含まれる。現在でも伝統的な生活をしているのは、台東の卑南(プユマ)族9世帯に限られるといわれるが、どの程度、先住諸民族が茶文化を楽しんでいるかは明らかではなかった。一方、莫大な展示物を保有する故宫博物院では、「玉」製の壺や食器の文化が茶器にも多大に影響を及ぼしていることがうかがい知れた。

1.3 その他関連施設

茶歌の現代的奏演に関する参考資料の入手や視察目的で、柳沢が以下の施設等を訪問した。以下、時系列に沿って列記する。

国立国会図書館(東京都千代田区 10月25日)

京都御所(京都市上京区 11月20日)

大阪音楽大学付属楽器博物館(大阪府豊中市 11月22日)

国立国会図書館では茶関係の文献調査、京都御所では日本の文化様式理解のための建造物、庭園、各部屋の装飾品などの視察、大阪音楽大学付属楽器博物館では古今東西の奏演に関する資料収集および楽器(ピアノ、ヴァイオリン)製作現場でのポリシーやその技術の一端に触れ、関連資料収集を行った。以上を通じて、奏演の幅広い可能性を再確認し、楽器の特性を活かした奏演技術を向上させるための参考になった。

また、柳沢は以下の施設においてアーカイヴス関係の調査を行った。

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市 10月24日）

江戸東京博物館（東京都墨田区 10月26日）

大阪歴史博物館（大阪府中央区 11月19日）

これらの施設では、日本及び世界の音源映像資料のアーカイヴスの現状、インターネットを含めた一般公開に関する留意点などについて示唆を得た。また、国立歴史民俗博物館では、1403年（応永10年）茶売人道覚の一服一銭の資料を閲覧した。

2. 関連演奏会、祭典などの見学

今回、新しい文化の創造とその演奏を大きなテーマとする演奏会、祭典等を取りあげ、見学した。これらを時系列順に並べると、次のようになる。

民俗音楽調査（スペイン各都市、2004年9月23日～10月16日、大槻）

日本たぬき学会（愛媛県東予市中央公民館大ホール 2004年10月30～31日、大槻、小西）

永井彰リサイタル（長野県佐久市、2004年10月31日、柳沢）

世界お茶祭り（静岡市グランシップ大ホールほか、2004年11月3日、大槻、柳沢、小西）

新作能「利休」（静岡市グランシップ中ホール、2004年11月3日、大槻、柳沢、小西）

現代ピアノ作品のタベ（東京都江戸川区タワーホール船堀大ホール、2005年7月5日、大槻）

まず、スペインでは大槻が王立マドリッド上級音楽院音楽学セミナーに参加し、エミリオ教授との共同研究により、民俗音楽ホタに関する分析を行った。その上で、10月7日からサラゴサ市での聖ピラール祭に参加し、民謡ホタの伝統継承と再創造に関する情報を得た。さらに、市文化広報担当者と接見し、ホタ・コンクール等の開催により民謡が地域活性化のための資源として有効活用されている現状を把握した。

日本たぬき学会は、タヌキ研究者、タヌキ愛護者、郷土史研究家、たぬきグッズ収集家など、「たぬき」について幅広い関心をもつ人々が集い、多様な観点からタヌキおよびたぬきを巡る文化について意見交換する会である。今回のホスト役となった東予市により、新作の郷土芸能（小女郎たぬき踊り）への市民参加やたぬきに関係する郷土菓子の製造など、地域活性化のために「たぬき」を活用する取り組みなどが紹介された。

世界お茶祭りは、2001年より3年に一回開催されており開催地は静岡である。緑茶はもちろん、世界のさまざまなお茶とその文化が紹介され、試飲コーナーも設けられていて、家族連れ等で大いに賑わっていた。しかしながら、展示コーナーの雰囲気合うBGMがなく、こうしたイベントでの新しい茶歌へのニーズがあることが確認された。

「永井彰リサイタル」、「現代ピアノ作品のタベ」では、現在活躍中の邦人作曲家の作品を鑑賞することにより、日本の音楽素材を現代化するための演奏技術や表現方法について、理解を深めた。また、新作能「利休」は、千利休の逸話をもとに創作された新作能の初公演であった。舞台の中央に据えられた茶釜を使った茶の振る舞いから開演されるなど、茶文化を取り入れた新しい演出は注目すべきものであった。

3. 茶歌・茶文化に関する聞き取り調査

3.1 栗田米一氏³（天竜市横川、2004年11月2日、柳沢）⁴

栗田氏は、1926年1月に茶節競演会の選手として上京した栗田八蔵の孫にあたり、当時の茶業組合からの通知文も保管している（写真4）。祖父の血を受け継いだのか、栗田米一氏宅の床の間には、氏が歌謡大会で獲得した多数のトロフィーが並べられていた。

栗田米一氏からの聞き取り内容は、1) 茶の生産、販売の歴史的变化、2) 祖父と茶歌の思い出に関するものであった。1) に関する主たる内容は、①かつての主たる収入源がお茶であったのに対して、現在では椎茸や木材の生産も行っていること、②茶作りの方法が父親の時代からも変化したこと、③かつては日本茶が主であったが、現在で

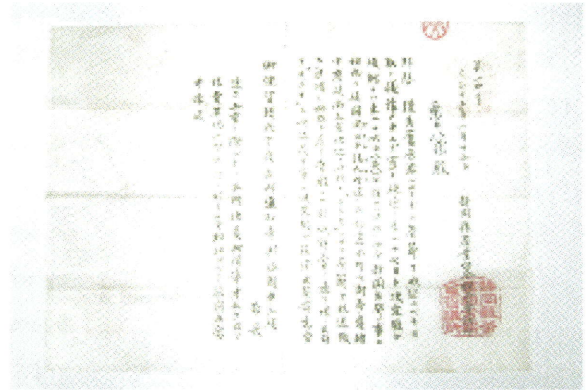


写真4：茶業組合からの通知文（1926年）

は紅茶、ウーロン茶など輸入茶も好まれること、④それに対して、日本茶の効用をPRして普及に努める傾向があること、⑤現在では、ペットボトルなど買うお茶へと変化していることであった。2) に関しては、①現在では多忙で情報過多となったが、かつては茶摘歌、茶もみ歌の歌詞は歌い手が補足したもので、その際にお茶を飲みながらの世間話も組み込まれた可能性がある、②祖父（八蔵氏）は非常に性格の明るい人で、仕事（手づみ）でも歌を口づさんだ、③茶歌を歌いながら作業したため、よいお茶が仕上がったのであろう、ということであった。以上のように、茶農家をめぐる社会的状況の変化により、当時のままの茶歌を再現することは困難であり、現在求められる茶歌のあり方を考えることの重要性が実感された。

3.2 落合宏雄氏⁵（菊川市、2005年7月12日、大槻）

1943～1945年、大井牧ノ原海軍航空基地で激しい訓練を行っていた若い航空兵達は、日曜には付近の各家庭に受け入れられていた。そうした中で、近江氏宅に滞在した本所・牛渕部隊の兵隊（氏名不明）が、余興のための茶摘み歌を所望した。そこで、小学校教員であった氏の父・落合勝郎氏の発案で付近を探し回り、静岡県郷土唱歌「牧ノ原茶摘み歌」の詩を見つけた。その旋律は残っていなかったため、作曲家・額賀松吉氏（航空兵・額賀辰雄氏の兄）のもとへ送り、作曲してもらった。その曲は、兵隊達による演奏のみならず、落合勝郎氏勤務の小学校においても学芸会や音楽会で演奏された。また、1946年4月29日には、朝日新聞社女性合唱団・プロの吹奏楽団の演奏により「茶摘み小唄」としてNHK全国放送の電波にのった。

その後、長い間この歌がうたわれなかったが、落合勝郎氏は『郷土新聞』（2000年3月3日付）にこの経緯を掲載し、また記憶を辿って旋律を譜面化するとともに山田成治氏に編曲を依頼、また踊りの振り付けもして「茶の香り」と称して、2001年に復活公演をした。現在、小笠高校からブラスバンドへの編曲も要請されているという。

4. シンポジウム・学会等

4.1 懇話会（静岡大学教育学部 E201、2004年12月11日、大槻、柳沢、小西）

本プロジェクトの大きな特色の1つとして、発信者としての専門家が市民に新しい作品やその奏演を提示するのではなく、段階ごとに多くの人々の意見を求めながら創作や普及活動に携っていただくとい

う「市民参加型」をめざすことがあげられる。その最初の試みとして、中村羊一郎（民俗学）、高崎譲寧（民謡収集家）、葉桐清一郎（茶業）、山田正訓（静岡県教育委員会文化課）、吉田道美（邦楽器演奏家・指導者）、吉田理世（邦楽器演奏家・指導者）ら6人の県内在住関係者を招聘し⁶、民謡素材をもとに大槻が作曲したピアノ作品を演奏し討論するための懇話会を開催した⁷。

葉桐清一郎氏から最高級煎茶を振る舞って戴いたこともあり、和やかながらも民謡や市民参加型という定義と意義、あるいは再創造に対する姿勢について、それぞれの立場から意見が出され真剣な討論がなされた。たとえば、過去の創作茶歌に関する問題点が指摘された一方、学校教育現場への還元を考える際には活発なリズムや飽きない工夫が必要だといった意見が提案された。

4.2 シンポジウム 「静岡の茶歌再創造と現代的奏演—市民参加型をめざして—」

（静岡市グランシップ交流ホール、2005年7月2日、大槻、柳沢、小西）

前述の懇話会における討論をふまえて、日本音楽表現学会大会アクアブルー大会第1日目の基調講演に続き、大槻が改作したピアノ作品「茶歌ヴァリエ2」を柳沢が演奏し、パネリストおよび会場参加者から広く意見を求めるためのシンポジウムを開催した⁸。パネリストは、中村羊一郎（民俗学）、須山由利子（静岡県教育委員会文化課）、吉田道美（邦楽器演奏家・指導者）である。

当初は参加人数が見込めなかったが、これまでのプロジェクト協力者をご招待し、また知人や卒業生にも積極的に広報活動を行った結果、学会員はもちろんのこと予想をはるかに超えた会場を埋め尽くす市民が参加してくれた。90分という限られた時間のなかで、プロジェクト概要説明、作品披露、パネリストからのコメント、会場参加者を交えての討論を組み込まねばならなかったため、その時間内に十分な意見をいただけないことも予想された。そこで、あらかじめアンケート用紙を配布し、自由記述のかたちで会場参加者に本プロジェクトに対する意見や提案を求めた。アンケートの分析は次年度までの課題であるが、おおよそのところ今回の試みに対する参加者の関心や期待の高さが明らかになり、また協力者として名乗り出てくれる方々もいらっしまった。

4.3 学会発表等

本プロジェクト関連の学会発表としては、第1回国際小島嶼文化会議における小西の発表（鹿児島大学、2005年2月5～8日、聴講：大槻）があげられる。国際小島嶼文化会議は、小さな島々の自然や文化に関する情報交換をし、その保護や研究を促進するための組織として2004年に設立された。その第1回目である今回は、トカラ列島など離島を含む地元関係者はもちろん、世界各地の研究者による活発な討論が行われた。資源の限られた小島では、人々のさまざまな工夫によって常に新しい文化が創造されている。たとえば、トカラ列島では個人的な関係からアフリカの民族楽器ジャンベがもたらされ、島の新しい文化として開花しつつあることが示された。小西は、本プロジェクトの理念である「市民参加型創造」をさらに推し進めて、「文化の担い手との共同研究」の事例について発表した。

5. 検討会議等と主要議事（参考）⁹

2004年12月20日（大槻・柳沢・小西） 懇話会およびシンポジウム打ち合わせ

2004年12月6～27日（於：教育学部 G-102、大槻・柳沢・小西） 高崎正美（玉川大学）氏による映像編集講習（合計3回、18時間）

2005年1月17日（大槻・柳沢・小西） 懇話会反省、台湾調査打ち合わせ

2005年1月31日（大槻・柳沢・小西） シンポジウム打ち合わせ

2005 年 3 月 19 日（大槻・柳沢・小西）平成 16 年度実績報告書作成についての審議

2005 年 4 月 25 日（大槻・柳沢・小西）申請書類作成、日本平動物園共同企画検討

2005 年 5 月 17 日（於：静岡新聞社、大槻・柳沢・小西）『静岡新聞』記事依頼

2005 年 6 月 2 日（於：教育学部 E 105、大槻・柳沢・小西）静岡新聞社・竹下雄一郎氏による取材、写真撮影

2005 年 6 月 8 日『静岡新聞』（夕刊、1 面）「生まれ変わる静岡の茶歌」として本プロジェクト紹介記事が掲載

2005 年 6 月 15 日（於：柳沢宅、大槻・柳沢）SBS 静岡放送番組「とれたてラジオ」で、「静岡の茶歌再創造」をテーマに、ピアノ曲「茶歌ヴァリエ 2」の実況放送

2005 年 7 月 3 日『静岡新聞』（朝刊、「総合」）7 月 2 日のシンポジウム内容が掲載

2005 年 7 月 19 日（於：静岡市民交流施設「来てこ」、大槻・小西）静岡ウクレクラブ代表・浅野富夫氏と接見、日本平動物園でのイベント参加要請

2005 年 7 月 22 日（於：日本平動物園、大槻・小西）学芸員・佐渡友陽一氏と 10 月 2～30 日の「秋の動物園祭」企画打ち合わせ

2005 年 7 月 22 日（大槻・柳沢・小西）日本平動物園企画および静岡県お茶室主催イベントに関する検討

2005 年 8 月 10 日（大槻）静岡ウクレクラブ代表・浅野富夫氏と第 2 回打ち合わせ

2005 年 8 月 15 日（大槻・柳沢・小西）研究報告の構成及び執筆分担、日本平動物園企画参加詳細、静岡県お茶室主催イベントに関する検討

-
- 1 本研究は、平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）「学校と地域社会を結ぶ民謡の発展的創造と現代的奏演に関する調査研究」、代表者・大槻寛および同基盤（C）「静岡県の民謡再発掘とその現代的再創造に関する調査研究」代表者・柳沢信芳）の援助を受けたものである。この場を借りて、感謝の意を表したい。
 - 2 本調査研究の目的および平成 16 年 5 月から平成 16 年 9 月までの経緯については、昨年度の報告書を参照されたい（大槻・柳沢・小西 2005「静岡県の民謡再発掘とその発展的創造、現代的奏演に向けての調査研究報告」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』55：267-272）。
 - 3 平成 16 年前半期には、高崎譲寧氏提供の資料により 1926 年茶節競技会参加者の関係者へ聞き取り調査を行った。この元となる資料は、栗田米一氏が保管していたものであることがわかった。
 - 4 本調査には、森有世（静岡大学大学院教育学研究科 1 年）が同行し、記録作業に従事した。この場を借りて、感謝の意を表したい。
 - 5 落合氏とは、後述の『静岡新聞』（6 月 8 日付、夕刊）における本プロジェクト紹介記事をきっかけに情報提供をいただいた。
 - 6 なお、招聘者（敬称略）のご所属・ご専門等は中村羊一郎（静岡産業大学教授 文化人類学 日本文化史）、高崎譲寧（民謡研究家 元沼津市音楽教員）、葉桐清一郎（「平成の売茶翁」株式会社葉桐取締役社長）、山田正訓（静岡県教育委員会文化課芸術文化振興班芸術文化担当 指導主事）、吉田道美（箏・三絃・胡弓教室講師、浜松市立高等学校箏曲部指導員）、吉田理世（宮城社大師範・生涯学習音楽指導員）である。ご多忙中にご協力いただいたことを感謝する次第である。
 - 7 なお、当日の司会進行とプロジェクト概要説明は小西が、記録には森有世（静岡大学大学院教育学研

究科1年)、土井恵(静岡大学教育学部2年)、青野友美(同)があたった。この場で感謝の意を表したい。

8 なお、当日の司会進行とプロジェクト概要説明は小西が行った。また、記録には森有世(静岡大学大学院教育学研究科2年)、ツォク(同、2年)、寺崎庸(同、1年)、今村圭(同、1年)があたり、森、今村両氏にはその後のテープ起こし作業にも従事してもらった。この場で感謝の意を表したい。

9 開催場所を明記していない会議は、教育学部 E103 で行った。